

大谷藤郎著

『らい予防法廃止の歴史』愛は打ち克ち 城壁崩れ陥ちぬ』

ハンセン病者に対する偏見と差別は、古くからみられました。ヨーロッパでは、初期のキリスト教が社会的弱者・病者などを救いの対象として活動し、聖者たちが病いを癒した奇蹟などが語り継がれて、信者を増やしてきました。しかし西ローマ帝国が倒れ異民族が封建国家を建設するころになると、キリスト教は次第にその性格を変え、国王や領主などの支配者層と結びついてゆきます。その結果病者は、救われるべき者から罰せられるべき者となり、ハンセン病者を一般の社会から追放し、ラザレットと呼ばれる収容施設に隔離するという支配者層の政策に、教会が手を貸すという現象が起りました。その後十四世紀半ばにヨーロッパ全土を襲ったペスト(黒死病)の大流行によって、病弱なハンセン病者は激減したという悲しい歴史があります。

わが国でも、外国との交流が始まったあとハンセン病の発生がみられるようになりましたが、患者は永い間社会的差別を受け続け、明治四十年「癩予防に関する法律第11号」が施行されるまで、放置され続けてきたのです。

昨年大谷藤郎先生が世に問われた『らい予防法廃止の歴史』は、明治以降のわが国のハンセン病対策とその功罪について、日本がたどってきた膨張政策、選民思想、軍国主義的風潮と

からめながら、詳細に跡づけされた労作です。殊に昭和六年「旧・癩予防法」が施行されたあと、国立療養所の整備が進められた時代には、ハンセン病者は国家目的に役立つに役立たない邪魔者・厄介者の烙印を押され、療養所への強制入所が人権無視のまま押し進められた事情や、昭和二十八年「新・らい予防法」の時代に移行後も、厚生医療を標榜しながらも、引き続き強制入所が続けられてきた経過が、詳しく述べられています。

その後治療薬の開発普及などにより重症者は減少し、ハンセン病は治り易い感染症のひとつに過ぎないこと、一般の人が感染発症する可能性は非常に少ないこと、強制隔離が唯一の予防法であるという考え方は誤りであること、などが広く知られるようになり、関係者の永く苦しい努力が実って、平成八年ようやく「らい予防法」の廃止という画期的成果に結びついた事情なども、豊富な資料を駆使しながら述べられています。

著者の大谷藤郎先生は、皆さまよく御承知の通り、厚生省公衆衛生局長、医務局長等を歴任され、退官後は財団法人藤楓協合理事長、高松宮記念ハンセン病資料館長、厚生省公衆衛生審議会会長等として、厚生行政の中核を担われ、特にハンセン病患者の処遇改善や「らい予防法」の廃止へ向けて、中心的役割を果たしてこられた方です。永年にわたる公衆衛生への御功績によって、レオン・ベルナル賞を受賞されています。評者も会議や講演会などで何度か先生の御声効に接し

たことがあります、その都度先生の役人ばなれした情熱に感銘を受けたことを記憶しています。

評者の住む熊本にも、明治時代イギリス人リデル・ライト、ハンナ・ライトによって開設された救癩施設「回春病院」や、私立の「琵琶崎待労病院」の永い歴史があります。また当地には、十三の国立療養所のうち最大規模の「菊池恵楓園」があり、救癩に一生を捧げられた元園長の故宮崎松記博士をはじめ、多くの先達の御努力の跡を偲ぶこともできます。

著書の中でも特に胸を打つのは、国家の法律と政策によって、強制的に療養所に隔離収容され続け、残された家族のために名を伏せ世間の耳目を避けて生き、ひっそりと世を去っていった多くの患者さんの手記です。歌人津田治子をはじめ無名の患者さん達の、心に浸みる文章も多く採り上げられています。

本書は、時の流れに乗り遅れた政策によって、いわれのない偏見と差別を受け続けた、多くの患者さんやその肉親の苦しみを、二度と繰り返してはならないことを教えてくれるばかりではありません。わが国のハンセン病対策を正道に戻すため、勇気をもって立ち向かった多くの関係者の永く苦しい闘いの軌跡や、長期にわたる療養所生活により高齢化し社会性の低下した、残された患者さんへの生活支援対策の大切さなどを、余すところなく描いたドキュメントです。副題の「愛は打ち克ち城壁崩れ陥ちぬ」に込められた、著者の深い感慨が伝わってきます。

読み終えて心に重みを感じる本で、すがすがしい読後感を与えてくれるものとは対極をなす一冊ですが、あえて諸賢に御一読をお勧めする所以であります。

(橋本 和朋)

〔勁草書房・東京都文京区後楽二―三三一―五、〇三―三三八
一四―六八六一、一九九六年六月発行、A4判、五〇四頁、
四、二〇〇円〕

二宮陸雄著

『種痘医北条諒斎 天然痘に挑む』

牛痘接種法の世界各国への伝播の歴史は、医史学の分野でもっとも中心的なテーマの一つであり、そのドラマチックな伝播の様相によっておおくの研究者の研究心をかき立てている。わが国における各地の牛痘接種の状況についても、そこに現存する史料と、そこに存在する医史学者の手によって次第に解明されている。しかしその流れを一本にまとめ、わが国の牛痘種痘史をえがこうとすると、かなりの忍耐を必要とする困難な作業となる。その困難な研究にたちむかって、五五〇頁という大著にまとめられたのが本書である。著者は本書の執筆に五年の歳月をついやしたという。それに先立つ資料調査と実地踏査に要した歳月をくわえれば、おそらく一〇年に垂んとする時間をこの仕事のためにさいたにちがいない。